

中日新聞  
「リンクト」LINKED  
PRESENTS  
病院を  
I KNOW! HOSPITAL AND MEDICAL  
知ろう

大垣市民病院

企画制作 中日新聞広告局 編集 プロジェクトリンクト事務局

「安心を届けたい」。  
薬剤師だからこそできる、  
がん患者のサポート。



HERE! e-LINKED  
[www.project-linked.jp/](http://www.project-linked.jp/)

# 薬剤師がチーム医療の要となり、 がん薬物療法の安全性を確保し、 治療効果の向上に貢献していく。

地域がん診療連携拠点病院として、地域の医療機関と連携し、専門的ながん医療に取り組む大垣市民病院。

同院では、11名もの〈がん専門薬剤師〉を擁し、医師との協働体制のもと、高度ながん薬物療法を実践している。実習や見学で訪れた学生の多くが「自分もここで働いてみたい」と口にする、ハイレベルな薬剤部の魅力を探った。

## 毎日、各病室の 患者の顔を見に行く。 01

大垣市民病院の薬剤部では、特定の領域に精通した専門薬剤師や認定薬剤師を育て、各病棟をはじめとする臨床の現場に配置している。その一つが、がん領域の薬物療法のエキスパートである〈がん専門薬剤師〉。がん専門薬剤師は、基本的な調剤業務や薬品管理などを行うかたわら、病棟と外来に分かれ、チーム医療の一員として活躍している。

はじめに、病棟薬剤師の活動を見てみよう。入職23年の宇佐美英績（がん専門薬剤師）が担当するのは、白血病など血液がんの患者が多く入院する3病棟



5階（血液内科48床・神経内科4床）。一日の半分はこの病棟にて、入院患者のベッドサイドを訪ねてまわる。とくにがん患者に対しては、抗がん剤に対する不安はないか、副作用で苦しんでいないか、患者の様子に心配り話しかける。副作用の発現状況によっては、主治医に支持療法薬（副作用に対する薬）の処方を提案することもある。

宇佐美のモットーは「とにかく患者さんと顔を合わせること」。患者さんから副作用の症状についてお聞きして、初めて分かることもあり、貴重な学びが得られます」と話す。そんな宇佐美の来訪を待ちにして、いろいろな思いを打ち明ける患者も多いといふ。「主治医には聞かにくいくことや、看護師ではわからない専門的な抗がん剤の疑問や悩みに答えるのが私たちの役割。患者さんに安心して抗がん剤治療を受けていただけるように、薬剤師だからできるサポートをしていきたいと考えています」。

この他、宇佐美の重要な役割として、抗がん剤の治療計画（レジメン）の登録・管理がある。

患者さんと顔を合わせること。新しいがん治療薬の導入が院内の化学療法検討部会、がん診療委員会で審議・承認されると、宇佐美を中心としたがん専門薬剤師3名から成るチームが、薬剤の科学的根拠を確認した上で、投薬の量や順番、期間、手順などを定めた計画書を作成する。すでに、同院に登録されているレジメンは8807件に達した（平成27年4月1日現在）。

「レジメン管理は、小さなミスでも患者さんの命に関わる仕事。3名で厳重にチェックし、安全に徹しています」と宇佐美は話す。宇佐美のモットーは「とにかく患者さんと顔を合わせること」。患者さんから副作用の症状についてお聞きして、初めて分かることもあり、貴重な学びが得られます」と話す。そんな宇佐美の来訪を待ちにして、いろいろな思いを打ち明ける患者も多いといふ。「主治医には聞くことや、看護師ではわからない専門的な抗がん剤の疑問や悩みに答えるのが私たちの役割。患者さんに安心して抗がん剤治療を受けていただけるように、薬剤師だからできるサポートをしていきたいと考えています」。

新しいがん治療薬の導入が院内の化学療法検討部会、がん診療委員会で審議・承認されると、宇佐美を中心としたがん専門薬剤師3名から成るチームが、薬剤の科学的根拠を確認した上で、投薬の量や順番、期間、手順などを定めた計画書を作成する。すでに、同院に登録されて

いるレジメンは8807件に達した（平成27年4月1日現在）。「レジメン管理は、小さなミスでも患者さんの命に関わる仕事。3名で厳重にチェックし、安全に徹しています」と宇佐美は話す。宇佐美のモットーは「とにかく患者さんと顔を合わせること」。患者さんから副作用の症状についてお聞きして、初めて分かることもあり、貴重な学びが得られます」と話す。そんな宇佐美の来訪を待ちにして、いろいろな思いを打ち明ける患者も多いといふ。「主治医には聞くことや、看護師ではわからない専門的な抗がん剤の疑問や悩みに答えるのが私たちの役割。患者さんに安心して抗がん剤治療を受けていただけるように、薬剤師だからできるサポートをしていきたいと考えています」。

がん専門薬剤師の姿を見てみよう。まずは、抗がん剤の点滴治療を行う通院治療センター（30床）。ここでは曜日担当制で、がん専門薬剤師が常駐。抗がん剤や支持療法薬について患者に説明したり、点滴治療を受けている患者の体調や副作用のモニタリング（観察）を行

う。まず一つは、抗がん剤の点滴治療を行う通院治療センター（30床）。ここでは曜日担当制で、がん専門薬剤師が常駐。抗がん剤や支持療法薬について患者に説明したり、点滴治療を受けている患者の体調や副作用のモニタリング（観察）を行

## 外来部門で活躍する がん専門薬剤師たち。 02

外で活躍するがん専門薬剤師たち。

がん専門薬剤師の姿を見てみよう。まず一つは、抗がん剤の点滴治療を行う通院治療センター（30床）。ここでは曜日担当制で、がん専門薬剤師が常駐。抗がん剤や支持療法薬について患者に説明したり、点滴治療を受けている患者の体調や副作用のモニタリング（観察）を行

う。まず一つは、抗がん剤の点滴治療を行う通院治療センター（30床）。ここでは曜日担当制で、がん専門薬剤師が常駐。抗がん剤や支持療法薬について患者に説明したり、点滴治療を受けている患者の体調や副作用のモニタリング（観察）を行

## 11名ものがん専門薬剤師を擁している理由。 03



宇佐美、安達、木村の活動

のストレスをできるだけ減らし、無理なく治療を続けられるようにと、いつも心を碎いています」と安達は語る。

もう一つの外来部門は、外来服薬指導室での薬剤師外来である。これは、とくに副作用が強い経口抗がん剤の通院治療を受ける患者を対象に、がん専門薬剤師が面談するもの。初回は服用方法などについて説明し、2回目以降は、副作用に対するマネジメントを行う。「患者さんの状態に応じて、抗がん剤の投与量の軽減や休薬を医師に相談

することもあります」と説明するのは、がん専門薬剤師の木村美智男である。薬剤師が問診した内容は電子カルテを通じて医師に伝えられ、治療計画に役立てられている。また、ステージが進んだがん患者に対しては、緩和ケアに関するアドバイスも行う。「当院には、緩和薬物療法に精通した認定薬剤師もいますが、一緒に相談に答えることもあります。精神的なケアも含めて、在宅で治療を続ける患者さんをトータルに支えていきたいと考えています」と木村は語る。

国立がん研究センター東病院などと比較しても圧倒的に多く、

これは、全国の大学病院などと比較しても圧倒的に多く、

薬物療法が複雑化し、患者さんの安全性を確保するための薬学的管理が重要になってきた、といふ「一々語ります」と答えるのは、薬剤部長の吉村知哲である。抗がん剤の種類が増え、薬剤の選択肢が増えると

「がん医療の進歩とともに、多くのがん専門薬剤師を擁しているのだろうか。



## COLUMN

並ぶ数字である（平成28年1月現在）。なぜ、同院ではこれほど多くのがん専門薬剤師を擁しているのだろうか。

に共通するのは、薬剤師が、医師との協働の意識を持ち、積極的に处方提案していることだろ

う。そうしたがん専門薬剤師が、同院には11名も在籍している。これは、全国の大学病院などと比較しても圧倒的に多く、

国立がん研究センター東病院などと比較しても圧倒的に多く、

薬物療法が複雑化し、患者さんの安全性を確保するための薬学的管理が重要になってきた、といふ「一々語ります」と答えるのは、薬剤部長の吉村知哲である。抗がん剤の種類が増え、薬剤の選択肢が増えると

市民病院では早くから、これらの専門薬剤師・認定薬剤師研修施設の認定を受け、薬剤師の教育施設の役割を担ってきた。

●現在、がん専門薬剤師の指導者資格である「がん指導薬剤師」の有資格者は、本編で登場した吉村、宇佐美、木村を含め、4名にのぼり、充実した教育環境を整えていく。同院には、岐阜県内はもちろん、県外の病院からも、意欲ある薬剤師が研修を受けるために集まつてくる。「当院で学んだ知識と技術をそれぞれの病院に持ち帰り、薬物療法の向上に役立てていただければ本望ですね」と吉村は言う。

もに、副作用も多様化。そのための薬学的管理が重要視されてきたのだ。「進化するがん診療に携わる以上、副作用マネジメントで治療の継続性を高め、当院のがん薬物療法の質的向上に貢献したい。そのためには、薬剤師自身がより専門性を高めていこう。そうした空気が部内で広がり、根づいてきました。今では専門的な資格を取つて当たり前という意識ですね」。

「病院という視点で考えると…」と吉村は言葉を続ける。「当院は西濃医療圏の基幹病院です。がん患者さんも一極集中しています。がん患者さんは、当院で治療の道筋をつけ、あとは地域の病院と連携するのがよいのですが、なかなかそうはいかず、いきなり在宅でというケースが多くあります。そのとき患者さんが安心して、診療所で円滑に治療を継続できるために、薬剤師による〈繋ぐ機能〉が必要とされるかと思います」。

## 地域のがん薬物療法のレベルアップをめざす。

04



企画制作  
中日新聞広告局  
編集協力  
大垣市民病院  
〒503-8502  
岐阜県大垣市南頬町4-86  
TEL 0584-81-3341(代表)  
FAX 0584-75-5715  
<http://www.ogaki-mh.jp/>

お問い合わせ  
中日新聞広告局広告開発部  
TEL 052-221-0694  
FAX 052-212-0434  
プロジェクトリンク事務局  
TEL 052-884-7831  
FAX 052-884-7833  
<http://www.project-linked.jp/>

中日新聞  
「リンクト」**LINKED**  
PRESENTS  
病院を  
知ろう

プロジェクトリンクト

検索

LINKED VOL.22 タイアップ

は、院外の薬剤師と一緒にがん薬物療法を学ぶ勉強会にも力を入れている。平成23年には、吉村の呼びかけで「岐阜県がん薬物療法懇話会」を発足。毎年1回、県内のがん薬物療法に携わる薬剤師が参加し、活発に情報交換している。その他、大垣薬剤師会に所属する保険薬局などの薬剤師を対象に、抗がん剤治療の勉強会を開催するなど、地域的役割を担う。「近年のがん治療は入院期間が短く、通院しながら在宅療養する患者さんが増えています。そういう在宅の患者さんを支えるために、私たちが蓄積してきた専門知識やノウハウを、在宅医療の分野で活動する薬剤師と共有し、ともに知識・技術を高めていきたいと思います」と吉村は意欲を見せる。

●がん治療については、医療の進歩と外来薬物療法の普及に伴い、在宅で治療を続ける患者が増えている。「病院から在宅へ」と医療提供体制の転換が進むなかで、在宅で治療を受ける患者は今後さらに増え、住み慣れた我が家で人生の最期まで過ごすことを希望する人も増えていくものと予想されている。

●しかし、抗がん剤やがんの痛みを和らげるモルヒネ製剤など、がん治療に関する薬剤は取り扱いが難しく、在宅医療の分野では充分に対応できる診療所や保険薬局の数は限られているのが現状だ。そういうときに頼りになるのは、大垣市民病院のような基幹病院で専門性を磨いた専門薬剤師・認定薬剤師だろう。がん薬物療法に関する豊富な臨床経験や緩和ケアの知識を地域の薬剤師に伝えることで、〈薬剤管理〉という側面から、がんとともに生きる人たちを支えていけるのではないかだろうか。

また、同院ではがん領域以外にも、NST（栄養サポーチ）・感染制御、緩和薬物療法、抗菌薬物療法、小児薬物療法などさまざまな分野で、専門薬剤師・認定薬剤師が育っている。さらに、自分たちが得た研究成果を社会に還元するために、論文執筆や学会発表といった学術的な取り組みも積極的に行っている。高いモチベーションを持つ仕事に取り組む薬剤師たちが、その先に見つめるのは、「日本一の薬剤部をめざそう」という大きな目標だ。「日本」というのは、規模や設備の充実などではありません。一人ひとりの薬剤師が高い実力をもち、チーム医療の一員として、患者さんの薬物療法をしっかりと支えていく。安全で質の高い薬物療法に

貢献できる〈日本一の薬剤部〉をめざして、これからも職員一同、邁進していきます」。吉村は力強い口調でそう語った。



B A C K      S T A G E

●がん治療については、医療の進歩と外来薬物療法の普及に伴い、在宅で治療を続ける患者が増えている。「病院から在宅へ」と医療提供体制の転換が進むなかで、在宅で治療を受ける患者は今後さらに増え、住み慣れた我が家で人生の最期まで過ごすことを希望する人も増えていくものと予想されている。

●しかし、抗がん剤やがんの痛みを和らげるモルヒネ製剤など、がん治療に関する薬剤は取り扱いが難しく、在宅医療の分野では充分に対応できる診療所や保険薬局の数は限られているのが現状だ。そういうときに頼りになるのは、大垣市民病院のような基幹病院で専門性を磨いた専門薬剤師・認定薬剤師だろう。がん薬物療法に関する豊富な臨床経験や緩和ケアの知識を地域の薬剤師に伝えることで、〈薬剤管理〉という側面から、がんとともに生きる人たちを支えていけるのではないかだろうか。

●がん治療については、医療の進歩と外来薬物療法の普及に伴い、在宅で治療を続ける患者が増えている。「病院から在宅へ」と医療提供体制の転換が進むなかで、在宅で治療を受ける患者は今後さらに増え、住み慣れた我が家で人生の最期まで過ごすことを希望する人も増えていくものと予想されている。

●がん治療については、医療の進歩と外来薬物療法の普及に伴い、在宅で治療を続ける患者が増えている。「病院から在宅へ」と医療提供体制の転換が進むなかで、在宅で治療を受ける患者は今後さらに増え、住み慣れた我が家で人生の最期まで過ごすことを希望する人も増えていくものと予想されている。